中国がわかるシリーズ 24　武韋の禍の実態　（中）

ライフネット生命株式会社　代表取締役会長兼 CEO、出口　治明氏

683 年、高宗が没すると武后は、皇太后となり、おとなしい2人の息子（中宗、睿宗）を順に帝位に就けましたが、その政治に飽き足らず、695 年、自ら即位して国号を周としたのです（武則天による武周革命。唐は一時滅亡）。北方民族では、女性のリーダーは決して珍しくなく、唐と同時代の新羅でも、善徳女王（632～647）や真徳女王（647～654）が王位に就いています。また、北方民族では、嫡長子相続の原則（慣習）も希薄でした。実力が何よりも優先されたのです（隋唐帝国では、皇位の嫡長子継承のケースは稀です）。

高宗存命中から最高権力者であった武則天は、特に、人物を見る眼に長けており、古くからの山東貴族や建国の功臣（関隴貴族集団）を遠ざけ、選挙(科挙)をより重視して、全国から有能な人物を集めました。国老、狄仁傑は、自家薬籠中の物、と人材の豊富さを誇りました。これほど公正な能力主義を活用した王朝は、過去には例を見ませんでした（以後、科挙制は中国の大きな特徴となって行きます。もっともこの時代には、恩蔭系と呼ばれる家柄などで官位に昇るルートも、まだ残されていました。つまり、二つの出世ルートがあったのです）。武則天が、実質的な権勢者だった約半世紀の間、農民反乱は、ほとんど起こっていません。これも、武則天の優れた政治手腕の賜物でしょう。705 年、80 歳を超えた武則天は、さすがに病には勝てず、中宗を担いだクーデターによって譲位させられました。国号は唐に戻ったのです。

しかし、今度は、中宗の妻、韋后が娘の安楽公主と諮って専横を極め、邪魔になった夫（中宗）を 710 年に毒殺しました。睿宗の第 3 子、李隆基（第 9 代皇帝、玄宗）が決起し、睿宗を復位させましたが、今度は、睿宗の妹、太平公主が実権を手にしようとする始末でした。武則天の治世下で、女性たちは格段に逞しく育っていたのです。713 年、玄宗は軍を出して太平公主を自殺させ、ようやく女性優位の時代に終止符を打ちました。中国では、宋以降、儒教倫理が浸透して、女性は家庭に閉じ込められ、また、纏足を強いられるようになりますが、それに比べれば、男性と対等に権力を争った武則天や韋后の生き様は、非常に伸びやかでした。この時代の東アジアの風潮と、わが国の女帝の世紀（持統天皇以降の奈良時代）とは決して無縁ではないでしょう。

Copyright　ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社
発行人：岡本和久、発行：I-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社
URL: http://www.i-owa.com；E-mail: info@i-owa.com